



枕草子

目





志うとあり小ぢりし

上あれきん
莊子外物篇婦姑
勃磳とてつるま似
唐夫人乃姑の乳と
くめいごひ誰もい
わづまき事

れありあすむい人乃
人列くハあつる教
の心をうけていひま
初んてうくちゆれだ
論語晏平仲善與人
交久而敬之と孔子乃
かめつる。まことあり
かゝる事をも佛が
と慚愧ハ衆善之衣服
とつる。慚愧ハ他人
をせむく愧ハ他人
をせむく

あつていひもの

志うとありわめしむい。又志うとあ

り。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

ねる。志うとありわめしむい。あつていひもの。あつていひもの。

人乃まき。露れくせり。あつていひもの。あつていひもの。

ちやぎぬとす。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

けり。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

人乃まき。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

ねる。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

つ。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。

あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。あつていひもの。



やむらひく人としていふ慚愧
乃二はあくハ世ハハ父母
兄弟妻子とてよく知識者
も大小のちちとてよく
畜生と同等也と経て
男と女もは師も教もく
男女の中小もくもは師
もくもくもくもくもく
傍とてく。大木相成よの
さんの名とていふも人徳
さいつとあうさいつと
さいつとさいつとさいつと
さいつとさいつとさいつと

かゝぬらうとていふ小
係氏未摘丸小にわりの
めるとあり。河海云挿練
あもやくとさゆと中重
あゝ紅名也玉昔昔も乃
河海云打取強取も乃
わり。男女の装束も乃の
本持。板ひきののりも乃
異はさうりもく
わりの 細殿 河海

三光院後説廊ホトと
よめり。旧記は扇をホト
ノと點とそもを家れ
さありていふをびい
さいつとさいつと
さいつとさいつと
さいつとさいつと
さいつとさいつと

らあきとていふ
肉くさうとていふ
あきとていふ
わくも推さう人前
さいつとさいつと
らあきとていふ

必さうもさあさうあられ 男と女
法師もさあさうあられ 男と女
中もさあさうあられ 男と女
操練紅衣服を打たせしむるはやをさあさう
わりとていふ

てあもさあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女

さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女

さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女

さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女
さあさうあられ 男と女

三光院

三光院

又おもしろき事なりとて
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは
 こゝろもやういふ
 ばあより戸をあけたる
 この後こゝろあそぶ
 先まよふこと

すまのつとむりし
 たり 八帳乃とあり
 せう乃きあめらとあり
 き乃すうとあり

うけりて 八帳云諾
 承諾んかきりてとあり
 をりて我ととあり
 け双累乃心はさやうり
 ハびりあえとあり
 うたわりわきとあり
 袖うりわきとあり

おもしろき事なりとて
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

おもしろき事なりとて
 あより 八の男内れとあり
 り親乃程よ彼三の
 八帳れあひかゝる
 ゆんよあつとあり
 八のいひかゝる
 背八のいひかゝる
 人と上向よせとあり

まじりてあそぶ詩をよみ
詩乃乃神ノ感ノあり
 ありてあそぶ

おもしろき事なりとて
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

あそぶとあり
 八雲ひてあそぶ人あり
 下へいひかゝる人の意
 をききしとあるは

事なりしに... 天神... 又後天合れし... 素盞鳴尊乃帝部... 半頭天...

... 除月... 第一乃... 鬼備乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃... 除月... 第一乃...

停飲語遅いものを誦

志守

以中將 勲を以て信長
五年八月廿日藏人頭長
徳二年四月廿四日任
議事等々々恒徳の馬
とらふのうら 馬戸也
信濃殿乃水の御長
乃西より由松葉より

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

信長御殿 信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

以中將 勲を以て信長
五年八月廿日藏人頭長
徳二年四月廿四日任
議事等々々恒徳の馬
とらふのうら 馬戸也
信濃殿乃水の御長
乃西より由松葉より

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

はらふのうら
は信長のついでに信長と
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

志守とす。ついでに袖を
はりの意すれば信長
やがて教へ袖をわひ
て信長をさへりて

つひあつてしつれいしつ
嫁りてはくしつれいしつ
娘事には其うらうらう
うらうらう

いかにかきかき
後まづうらうらう
やがてこれなりせん
我人の袖よきまき
彼へんづきせき
かのねりうらう
うらうらう
くつらうらう
とらば悔ののしつ
いせの悔のうらう
伊勢物語よ
むすまへん
けふあつてしつ
とらば悔ののしつ

いかにかきかき
とらば悔ののしつ
いせの悔のうらう
伊勢物語よ
むすまへん
けふあつてしつ
とらば悔ののしつ

蘭者花時錦帳下
戸山雨夜草菴中
文集十七のり
あまは將に地居
てはれく
夜の夜
よは
蘭者
新中
若の

れが
らうらう
は
さ
あ
る
て
乃
あ
こ
る
た
は
は
は
は
は

いかにかきかき
とらば悔ののしつ
いせの悔のうらう
伊勢物語よ
むすまへん
けふあつてしつ
とらば悔ののしつ

いかにかきかき
とらば悔ののしつ
いせの悔のうらう
伊勢物語よ
むすまへん
けふあつてしつ
とらば悔ののしつ

蘭者花時錦帳下
戸山雨夜草菴中
文集十七のり
あまは將に地居
てはれく
夜の夜
よは
蘭者
新中
若の

かん 毛やの事を誰り
 むんとの事をいひて我し
 な中將よりみられたる
 で向もの人の事をうりち
 むらうの事いへば
 草乃菴と名けし
 とがめしきまうの事い
 りて。むらさきまうの事
 うんりまうの事いへば
 よぶありしやう
 町をれありまうの事
 くうりまうの事い

ひがうの事いへば
 ほかと一向の中將
 ハ堪ふべきまうの事
 りうぐまうの事いへば
 りうぐまうの事いへば
 ちのひの事いへば
 彼誑人のいひまうの事
 がの方よりまうの事いへば
 さうりまうの事いへば
 さうりまうの事いへば

みまうの事いへば
 ぶすまうの事いへば
 首尾く
 ぼらまうの事いへば
 あままうの事いへば
 ぼらまうの事いへば
 ぼらまうの事いへば
 ぼらまうの事いへば
 ぼらまうの事いへば

かまうの事いへば
 おまうの事いへば
 むらまうの事いへば
 各感くまうの事いへば
 むらまうの事いへば

保の経房あのはれ、佳かきし、
 中將のこま、若れ、
 さま、
 あま、

あま、
 あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

あま、
 あま、

いづれかおとすべし
はりのと只人あつても
おんよき左様にして
御縁結ぶは老賊
あざ子よむじもど
これぞとてつけしやん
被下りよ上りつけ
やんよ

修理助のりしり 未馬
奥まがらうへえしをに
およねと行成つちと
およはがふ通者へ

あがつつていぢりかとも
月召の秋の京友乃降月
をとりはは身かまよ
降月お友をいへんよ
こいしよこあつては
お望のまほつ今則光
よらびりによつて
よまねては日召と
おんは小昇遊やれ
これぞとてつけしやん
おんよき左様にして
御縁結ぶは老賊
あざ子よむじもど
これぞとてつけしやん
被下りよ上りつけ
やんよ

あがつつていぢりかとも
月召の秋の京友乃降月
をとりはは身かまよ
降月お友をいへんよ
こいしよこあつては
お望のまほつ今則光
よらびりによつて
よまねては日召と
おんは小昇遊やれ
これぞとてつけしやん
おんよき左様にして
御縁結ぶは老賊
あざ子よむじもど
これぞとてつけしやん
被下りよ上りつけ
やんよ

あつてはつていぢりかとも
月召の秋の京友乃降月
をとりはは身かまよ
降月お友をいへんよ
こいしよこあつては
お望のまほつ今則光
よらびりによつて
よまねては日召と
おんは小昇遊やれ
これぞとてつけしやん
おんよき左様にして
御縁結ぶは老賊
あざ子よむじもど
これぞとてつけしやん
被下りよ上りつけ
やんよ

あがつつていぢりかとも
月召の秋の京友乃降月
をとりはは身かまよ
降月お友をいへんよ
こいしよこあつては
お望のまほつ今則光
よらびりによつて
よまねては日召と
おんは小昇遊やれ
これぞとてつけしやん
おんよき左様にして
御縁結ぶは老賊
あざ子よむじもど
これぞとてつけしやん
被下りよ上りつけ
やんよ

伊勢人といふ人貴船の明
 神の所をいふははらり
 まりし元亨釋書よりハ
 い伊勢人のつれとまじり
 比るハ鞍馬と名をいハ
 られ日本紀ハ天武天皇
 皇の成るとまひハ
 名と又ハ右ハ名をい
 こふハこれとされハ
 鞍馬より後ハ方々これハ
 今ハハ方々遠くハ明
 釣ゆんとハ方々ハ
 天二神とハ方々にあ
 夜ハハハハハハハハ
 明とハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハ
 今ハハハハハハハハハハ
 拾遺云御匣殿ハ貞観殿
 の中ハあり上藤の女房
 を別ハハハハハハハハハハ

水鏡云延暦十六年藤原
 鞍馬寺
 梅つが子 梅壺 梅屋敷
 こハ梅屋敷のつが子ハ
 られハハハハハハハハハハ
 抄云梅壺梅西白梅東紅
 梅之由在清サ納言記と
 ありハハハハハハハハハハ
 本ハハハハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハ

伊勢人といふ人貴船の明
 神の所をいふははらり
 まりし元亨釋書よりハ
 い伊勢人のつれとまじり
 比るハ鞍馬と名をいハ
 られ日本紀ハ天武天皇
 皇の成るとまひハ
 名と又ハ右ハ名をい
 こふハこれとされハ
 鞍馬より後ハ方々これハ
 今ハハ方々遠くハ明
 釣ゆんとハ方々ハ
 天二神とハ方々にあ
 夜ハハハハハハハハハハ
 明とハハハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハ
 今ハハハハハハハハハハ
 拾遺云御匣殿ハ貞観殿
 の中ハあり上藤の女房
 を別ハハハハハハハハハハ

伊勢人といふ人貴船の明
 神の所をいふははらり
 まりし元亨釋書よりハ
 い伊勢人のつれとまじり
 比るハ鞍馬と名をいハ
 られ日本紀ハ天武天皇
 皇の成るとまひハ
 名と又ハ右ハ名をい
 こふハこれとされハ
 鞍馬より後ハ方々これハ
 今ハハ方々遠くハ明
 釣ゆんとハ方々ハ
 天二神とハ方々にあ
 夜ハハハハハハハハハハ
 明とハハハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハ
 今ハハハハハハハハハハ
 拾遺云御匣殿ハ貞観殿
 の中ハあり上藤の女房
 を別ハハハハハハハハハハ

春の物多し物づくは切
 りたるもいと作ふやと
 是れはよつし仲忠より
 顯舞の人の御心
 仲忠が御心いせしまの
 えりやとせししは
 のつろをわさるるも
 うつや地はふとゆふか
 ぬきをひきき天人の威
 けいけりし事侍の
 大長尾又そのまを
 のまもあはれし
 ふうふうとてとて
 てわらふ人にとて
 をいせしとてとて
 にはかにも仲忠がま
 人まのしされいよ
 し定ハ屋がハる侍を
 かしとてあつて仲忠
 をわらふとていし
 ひふふのまのまの
 お小舞よまのまの
 のまのまのまのまの

春の物多し物づくは切
 りたるもいと作ふやと
 是れはよつし仲忠より
 顯舞の人の御心
 仲忠が御心いせしまの
 えりやとせししは
 のつろをわさるるも
 うつや地はふとゆふか
 ぬきをひきき天人の威
 けいけりし事侍の
 大長尾又そのまを
 のまもあはれし
 ふうふうとてとて
 てわらふ人にとて
 をいせしとてとて
 にはかにも仲忠がま
 人まのしされいよ
 し定ハ屋がハる侍を
 かしとてあつて仲忠
 をわらふとていし
 ひふふのまのまの
 お小舞よまのまの
 のまのまのまのまの

あり糸のあれ
 毛の仲侍の御心いせし
 りゆふふゆふふの
 こまのまのまのまの
 かりのねにあつて
 西のまのあれは
 昔のまのまのまの
 唐の驩山宮のまの
 のまのまのまのまの
 集れ樂府のまのまの
 ようていつて
 自良文集四樂府云驩山高
 高の驩山上有宮朱樓
 紫殿三四重遲々方春
 日玉秋風暖々温泉溢
 嬋娟秋風山蟬鳴
 官樹紅翠華不來歲
 月夕牆有衣瓦有松
 君在征已五載何不一
 手其仲西去都門
 地 下田
 取上人のまのまのまの

毛の仲侍の御心いせし
 りゆふふゆふふの
 こまのまのまのまの
 かりのねにあつて
 西のまのあれは
 昔のまのまのまの
 唐の驩山宮のまの
 のまのまのまのまの
 集れ樂府のまのまの
 ようていつて
 自良文集四樂府云驩山高
 高の驩山上有宮朱樓
 紫殿三四重遲々方春
 日玉秋風暖々温泉溢
 嬋娟秋風山蟬鳴
 官樹紅翠華不來歲
 月夕牆有衣瓦有松
 君在征已五載何不一
 手其仲西去都門
 地 下田
 取上人のまのまのまの

ふんごうのりやとらう
唐のりやのりやのりや
人らとらうのりやとらう
こいつらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや

あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや

はれろくきとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや

あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや
あやふらとらうのりや

和布也

和布也

きりかきとどとれ佛
竹のつらさをうらむと
速也佛性のみりも
けりて時をうらむと
いふことゆゑとまふと
舟よりつらむをいふと
きりかきとあり

佛の歯牙のみりかき
松老尼乃の念のり
けりて比立比立尼
優婆塞 優婆塞を
四部乃の牙牙とあり
けりてうらむのあり
あふりてをうらむと
は所とあり

うらむとあり
屈氏ゆゑのあり
や屈乃の字や又董
乃の字のあり
うらむ埋れて花ぐ
まらぬとあり
これがうらむのあり
うらむとあり
かき合物をうらむと
佛性をうらむとあり
をうらむとあり

かりき事とあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり

かりき事とあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり

かりき事とあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり

かりき事とあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり

かりき事とあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり
けりてうらむとあり
まらぬとあり
うらむとあり

久保のこころを

ほろひいそくろくきゆ
きんこふゆふまき
まきあけやうやまの
まふりや

うらち二つをうらち

中権や杖皆おほ
に忠身二小書心漢宮
俊云正月卯月見批
杖作剛印杖厭鬼

山さむいめい

ひきこて芥のきり
るこれハ杖杖をつ
考ふもや杖を杖
杖とりやうらち

いそりちりちりしてたまひせまうり

又あけさせまふればふすばうりある印うらち

二つをうづえれさあうりうらちうらち

まきおほいりびきひけおとげあぐら

くけうりまざりては又いあぐらある

やうりんやいとほらんぶれうらち

乃のらうらちうらちうらちうらち

山さむいめいをのひきこてまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

はあうりせまふりいそりちりちり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

女院の侍

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

あくたゆハ梅の巻

梅表裏ヤ梅芳

月より正月

雪れハ

あふきハ乃観音

いひし首尾ハ

あふきハ乃観音

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

いそりちりちりしてたまひせまうり

人としふゆへに
あまの
ほろの
い
り

こ
本
丸
う

め
左
い
私

い
聖
あ
い

い
あ
は
あ
す

ま
う
つ
あ
い

つ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

ついでにわたりてあひかき
事なきまゝにこれにつれん
はづのちりて用まゝと
おぼえたりしにうひて障
し果のりて草書の罪
やうにきこも。被雷の
あくらりしにたまたれ被
えすくまをまひしとて
まじりりるをまじり
そのめまよひつてまじり
被雷より持る付本ニテ
う懼るまゝをたれ乃
ト上に事をつとむ
まじり

かきおろしてせましくしるす
ていひたれどおちせ事のめいのトわま
らん人のおちせ事のめいのトわま
わをせんころひてた近のはづの南の
はあられしるす

た近のつとの南のはづら
ののつとの南のはづら
雷を持るまゝにイまた
海のつとの南のつとわら
た近の陣の南の縁地
のの一雷を持るまま
うのつとの南のはづら
一条役とははのの雷
ゆをつとつとつとつと
まままままままま

かゝるの入ありしと見
ると年比の大作のの

まゝにわたりてあひかき
事なきまゝにこれにつれん
はづのちりて用まゝと
おぼえたりしにうひて障
し果のりて草書の罪
やうにきこも。被雷の
あくらりしにたまたれ被
えすくまをまひしとて
まじりりるをまじり
そのめまよひつてまじり
被雷より持る付本ニテ
う懼るまゝをたれ乃
ト上に事をつとむ
まじり

手紙口

九一

人ごもなきと山雲の
目影をりひあてし
春物いりりかき

ふざりて入るるをいれようあや
おひらきいりあやにはかた
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや
しらぬあやのあやのあやのあや

けふもさしとあや
あやのあや
あやのあや
あやのあや
あやのあや
あやのあや
あやのあや
あやのあや

春曙抄四終

